

13:30～16:20
(開場13:00)

共催: 梶山女学園大学トータルライフデザインセンター / 人間学・ジェンダー研究センター

講演1 13:35～14:20

近現代日本の家族と食生活

－ 私たちは誰とどのように食べてきたのか －

ほんだ まさたか

本多 真隆

立教大学 社会学部 准教授

早稲田大学人間科学学術院助手、明星大学人文学部助教、准教授などを経て、2023年より現職。

私たちは家族と食を密接に結びつけて考えがちです。たとえば『サザエさん』のように一家が揃って食卓を囲む姿を、日本人の昔からの典型的な食事の姿だと思う方も少なくありません。しかし歴史を紐解けば必ずしもそうでないことがわかります。明治期にちゃぶ台は一般的でなく、戦前は黙食がマナーでした。また「家族」の関係や範囲も時代によって変わってきました。この講演では、近現代日本の家族の歴史を紐解き、私たちが「誰」とどのように食べてきたのか。そして今後の社会の変化のなかで食生活のあり方がどのように変わるのかを考えます。

講演2 14:20～15:05

子どもの夕食と「社会の中の家族」

－ 子どもの発達段階と近代化の「後発効果」に注目して －

あんどう きわむ

安藤 究

名古屋市立大学 人文社会学部 教授

鹿児島国際大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校客員研究員を経て、2004年より名古屋市立大学。

「家族と食」について、社会の中に家族がどのように埋め込まれているかに着目して考えたいと思います。具体的には、20世紀後半以降の日本社会における家族領域と教育領域との関係性が、子どもの夕食に及ぼしてきた影響について検討します。「家族と食」については、しばしば「理想的な家族像」と距離のある家族のスタイルが食事に及ぼす影響が語られますが、子どもへの関心が高い家族だからこそ「一家団欒」的な夕食とはならない可能性もあります。こうした可能性を、子どもの発達段階による相違にも注意しつつ、日本と同様に後発的に近代化した他の社会の事例や「家族であること」の意味論も参照しながら、論じていきたいと思います。

講演3 15:15～15:45

家族の変容と食卓

－ 栄養面から見た食生活の変化 －

おいかわ さえこ

及川 佐枝子

梶山女学園大学 生活科学部 准教授 トータルライフデザインセンター食と健康ユニット長

三重大学大学院地域イノベーション学研究科特任助教、梶山女学園大学生活科学部講師を経て、2021年より現職。管理栄養士。

わが国では家族構造の変化に伴い、家庭内での調理や共食の機会が減り、個食や中食・外食が増加しました。食の多様化も進んだ結果、食塩や脂質の摂取過多、野菜の摂取不足といった傾向がみられるようになり、生活習慣病の増加、さらに若年女性のやせや高齢者の低栄養など、人々への健康影響が課題として取り上げられています。また、食習慣の継承の希薄化や、食の孤立が引き起こす心理的な影響も懸念されています。このような背景から本講演では、現代におけるこれらの食育・食支援のあり方について考えていきます。

総合討論 15:50～16:15

講師3名による質疑応答